

鋳物のデザイン

長谷川亀右衛門家旧蔵資料から

鋳物製品といえば、昔のものだと鍋や釜、現在よく見るものなら鉄製のフライパンなどのような規格品をイメージすることが多いかもしれませんが、実際には注文を受けて製造されるものも多くありました。受注生産されたもので私たちがよく目にするものには、寺院の梵鐘があります。しかし、そのような大型の製品は常に鋳造するものではなく、普段は小さな鋳物製品を鋳造していました。旧田中家鋳物民俗資料館が収蔵している長谷川亀右衛門家旧蔵資料には、これらを引き受けるための注文記録やデザイン画が多く残っています。

長谷川亀右衛門家は平成13年まで京都市下京区六条若宮町に店を構えた家です。江戸時代には社寺の灯籠や擬宝珠^{きぼし}、神仏具などを鋳造していました。京都市周辺の神社や寺院では、同家が製作した青銅の鋳物を見ることができます。明治以降は蠟型鋳造による仏具店「光文堂」として営業。国内外の博覧会へも出品して、活動の幅を広げました。

では、実際にどのように注文を受けていたのか、天保15年(1844)から嘉永2年(1849)にかけての注文を記録した冊子の記載を例に見ていきましょう。写真1は末年^{ひつじ}(弘化4年・1847)6月19日に、備後国(現・広島県東部)の法泉寺から、宣徳香炉1口の注文を受けた控です。注文内容は文字だけではなく図でも記載しています。この資料から注文を受けた香炉の特徴を読み取ることにします。蓋はデザイン画の左の文字から、雲形の透かして獅子の形をしたつまみがついたもののようです。また、香炉の身は三つ足で耳がついたもの、胴は雲龍の模様にすることがわかります。雲龍とは雲に乗って天に昇る龍のことで、茶道具などさまざまな鋳物製品に見られるモチーフです。注文時には大まかなデザイン案を図にただけですが、実際に製品をつくるには、もっと細かなデザインを考える必要があります。写真2は獅子だけを描いた図で、裏面には「香炉」と書かれており、香炉に配置する獅子のデザインを考えたものだとわかります。同じような獅子の図はいくつも残されていますので、さまざまなデザイン画を描いた上で、獅子の形や配置を決めていたと考えられます。



写真1 香炉の注文



写真2 獅子のイラスト

デザインを検討したことがよくわかる例が、写真3の水鉢のデザイン画です。「三谷銅器店殿江／見積り図面」、右上に鉛筆書きで小さく「水鉢」と書かれています。注文を受けた製品のデザインを描いて見積りとした図面です。水鉢本体が簡略に描かれていることや、大きさが示されていないことから、龍のデザインを確認するためのものなのでしょう。龍だけ描かれた図は数多く残されているのですが、下の写真2点は、見積り図面と同様に鉛筆で「水鉢」と書かれていますので、一連のデザイン画だと判断できます。龍の顔や尾の向き、胴の角度などが異なっていますので、水鉢をデザインするにあたって、いろいろな角度から描いて、龍をどのように配置するか、検討したのかもしれません。



写真3 水鉢見積り図面（上）と龍のデザイン（下）

写真4は、大きさが28 cmほどの釣猿です。フックのようにかけて使うもので、カーブした長い手が個性的な一品です。写真5は、釣猿のように手の長い猿が描かれています。一方の手が長く、もう片方の手で木の枝にぶら下がった様子が描かれています。実際の釣猿の製品は枝にぶら下がったものではなく、両手が長く伸びた形をしています。しかし、片手でつかんだ木の枝の先がフック状に曲がったようすは、釣猿の上に伸ばした手の形に似ているようにも見えます。製品の用途を考えながら、試行錯誤した様子がうかがえます。

長谷川家では代々さまざまなデザインの製品をつくってきました。このようなデザインはどのように作り出されたのか、そのヒントになるのが写真6の「侯先生」という絵です。江戸時代に刊行された『絵本通宝志』という本の一部を模写したものです。長谷川家の人たちは過去に作られた製品や絵画などを数多く模写することで製品づくりの基礎となったのでしょう。鋳物民俗資料館では、鋳物工場に展示している田中家の製品のほかに、企画展で長谷川家の製品や、製品づくりに使われた鋳型も展示することがあります。鋳物をご覧になる機会がありましたら、ぜひ製品のデザインにも注目してみてください。（吉川）



写真4 釣猿

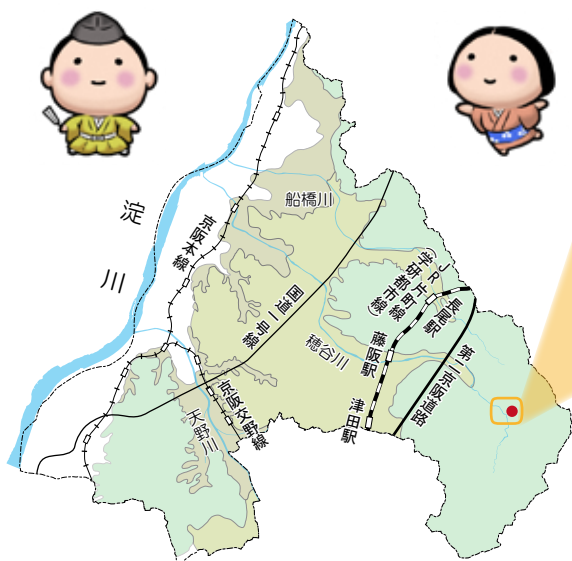


写真5 猿の下絵



写真6 侯先生

木造降三世・軍荼利明王立像の保存修理が開始されました



令和8年5月26日・27日、尊延寺の木造降三世・軍荼利明王立像は保存修理のため、京都の工房へ運び出されました。

尊延寺は枚方市東部の尊延寺地区に所在する真言宗の寺院で、本堂（不動堂）の中央に不動明王像、その周りを四大明王像が取り囲むように配置されています。これらの仏像はいずれも市指定文化財でしたが、四大明王像のうち降三世明王像（写真7、手前右）、軍荼利明王像（手前左）の両像は特に優れているため平成28年（2016）に重要文化財に指定されました。両像とも像高約158cm、檜材の一木造で、10世紀末から11世紀前半に中央の仏師により制作されたと考えられています。

しかし、経年の劣化により各部の^は矧ぎ目（継ぎ目）が緩み、表面の剥落が進んでいました。また、虫くい^{あな}孔もあるなど、早急な修理が必要でしたので、保存修理を行うことになりました。

両像は丁寧に梱包され修理工房へ運ばれた後、殺虫処置を行い、今後は表面彩色の剥落止めや釘・鏝^{かすがい}の打ち替え、虫くい箇所の充填、欠失部分の補足などが行われます。なお、今回の保存修理事業は、令和8年度から11年度まで4年にわたり行われる予定で、公益財団法人住友財団の助成金「文化財維持・修復事業助成」を活用しています。

保存修理期間中、両像は皆様にご覧いただくことができませんが、貴重な文化財を、50年後、100年後の未来へ良好な状態で受け継いでいくため、今回の修理も大切なステップとなります。無事に保存修理を終えお寺に帰ってきた際には、是非またご覧ください。



写真7 尊延寺本堂（中央が不動明王像、右前から時計回りに降三世明王像、軍荼利明王像、大威徳明王像、金剛夜叉明王像、不動明王像の前に地蔵菩薩像）



写真8 搬出するための梱包作業

未来へつなごう 「枚方市文化財保存活用地域計画」 ひらかたのたからもの をつくります！

枚方市では、市内にある文化財をまもり、いかし、つぎの世代に伝えていくために、「枚方市文化財保存活用地域計画」の策定をすすめています。

この計画には、文化財を保存・活用していくうえでの方針や取り組むべき内容を盛り込み、2年後に文化庁の認定を受けることを目指します。

枚方の歴史文化を見つめなおし、そこから枚方の未来を考える関連講座も開催しますので、ぜひご参加ください！



文化庁パンフレットから転載

文化財保存活用地域計画とは？

人口減少、少子高齢化等を背景に、文化財のにない手不足や散逸等が全国的な課題となっています。文化財をまちづくりにいかしつつ、地域社会が総がかりで文化財の継承に取り組んでいくことが重要であることから、平成30年（2018）の文化財保護法改正により、市町村における文化財の保存と活用に関する総合的な法定計画として制度化されました。

地域計画を策定することにより、これまで、文化財について所有者や文化財課等が対応していたものを、地域の文化財として相互に関連付け、行政・所有者だけでなく学校や地域社会全体で連携し、「保存」と「活用」の両立を図るとともに、まちづくりや観光等他の分野とも連携し、地域づくりにもいかしていこうとするものです。

イベント
開催予定

お知らせ

地域計画についての
ホームページはこちら⇒



イベント名	開催日
特別史跡百済寺跡周辺で開催します	
① 歴史ネット北河内広域リレー講座「ぶらり北河内 2026」	11/18（水）
総合文化芸術センター別館で開催します	
② 地域計画関連講座「わがまちの歴史文化とまちづくり」	11/23（月・祝）
枚方宿にある10店舗・枚方宿鍵屋資料館で開催します	
③ 第6回 枚方宿まちかど歴史展示 ※出土遺物を展示（岡本町会館）	12/1（火）～12/13（日） 12/13（日）のみ
旧田中家鋳物民俗資料館で開催します	
④ バーナーワーク講座（全4回）	11/18・25、12/2・9（水）
⑤ 彫金講座（全5回）	R9.1/16・23・30、2/6・13（土）
意賀美神社で開催します	
⑥ 文化財防火デーによる消防訓練	R9.1/23（土）
旧田中家鋳物民俗資料館・市内工場で開催します	
⑦ くらわんか鋳物ツアー 第3回 クボタ枚方製造所	R9.2/11（木・祝）

◆第6回 枚方宿まちかど歴史展示

枚方宿にある10店舗と枚方宿鍵屋資料館で、各店に伝わる昔の道具や市所蔵のくらわんか茶碗などを展示します。12月13日（日）には、岡本町会館で枚方宿遺跡の出土遺物や最新の発掘調査成果も展示。この1日しか見られない限定展示なので、ぜひお立ち寄りください。



昨年の展示の様子